

IFセミナーレポート

10/02/08

現代語・現代文化専攻

北川直緒

発表題目：

発表概要

今回の発表は、先月に提出した修士論文を元にしたものになっている。IFERIに提出したテーマは「ノルウェーの児童文学における大人と子どもの関係」となっているが、本稿では、題目を「トールモー・ハウゲン初期作品における子どもの消失 — 『夜の鳥』と『少年ヨアキム』を中心として —」としている。

英米（英語圏）が主流である児童文学界において、ノルウェーにおける児童文学はながらく抜け落ちていた存在だった。本稿の目的は、北欧児童文学の再評価と、近代の産物である児童文学の変換期の作品としてトールモー・ハウゲンの作品を位置づけることにある。

ハウゲンの作品に描かれた子どもは、フィリップ・アリエスの『<子供>の誕生』によって指摘された、近代に誕生した子どもでもなく、また、エレン・ケイによって指摘された、母性によって保護されるべき子どもでもない。しかし、単純に「子ども」と「大人」の差異が消滅し、子どもが「小さな大人」化しているものでもない。彼らは「大人」と区別された存在としての「子ども」とは違い、その意味が揺らぎ、変容している。本稿では、ハウゲンの作品が、児童文学でありながら「子ども」が消失していることを明らかにし、北欧児童文学の中におけるトールモー・ハウゲンの独自性を考察した。

第一章においては、児童文学界の動きを、ノルウェーを中心として、第一節においては、ハウゲンが生まれ育った1945年から1950年代を、第二節では初期作品を発表し始める1960年代から1970年代を、第三節ではハウゲンの作品が評価されていく1980年代以降とに区分して概観した。その結果、ハウゲンの作品のテーマが、一見して、時代の流れに非常に即した形で発表され、受容されていたことを明らかにした。

ハウゲンの作品が時代に即しているということは、同時代においては他の作家においても、同様のテーマが扱われていたということが考えられる。したがって、第二章においては、同時代に発表された他の作家による作品や、同様のテーマを扱った過去の時代における他作家による作品と比較していき、「家族」、「性差」、「大人と子ども」という三つの概念からハウゲンの特異性を明らかにした。ハウゲンの作品に描かれたものは、同時代の作家や学者が唱えた「多様な家族」ではない。ハウゲンは「家族」という概念そのものを疑問視し、解体させ、「個」として捉えようとしている。本章では、ハウゲンの扱っているテーマ及び、ハウゲンが問題視している点が、同時代あるいは他の時代における他作家による作品とは、異なる次元にあるのだということを示した。

前章で見てきたように、ハウゲンは、従来の児童文学における概念を疑問視しているが、創作児童文学、あるいは昔話の要素を意識して取り入れている。第三章では、ハウゲンの作品が、伝統的な物語の要素を持ちながらも、従来においてその物語が持っていた機能が失われていることを、ウラジミール・プロップの『昔話の形態学』を参考に明らかにし、ハウゲンの初期作品が、児童文学でありながら、「子ども」が揺らぎ、消失していることを、「現実の子ども」との関連から述べた。

これまで、ハウゲンの作品は、従来の児童文学における表現の「タブー」崩壊に伴う、単な

るリアリズムの作品の一つ、に集約されてしまうことが多かった。それは、80年代以降から起こる、ファンタジーの興隆が、60年代から70年代におけるリアリズム志向への反動として捉えられたことと関係している。従って、当時の作品は、時代の流行による一過性のものであると捉えられているのが現状であった。しかし本稿では、「社会派リアリズム」の流れの中で発表されたハウゲンの初期作品は、従来の児童文学的要素を持ち、さらに昔話の構造を持ちながらも、そこに描かれている「大人」と「子どもは、従来の児童文学や昔話とは違う描き方がなされていることを明らかにした。そこに描かれた「大人」と「子ども」の関には揺らぎが見え、両者の境界が曖昧になっており、最終的には、ハウゲンの初期作品が、児童文学でありながら、「子ども」が消失していることが明らかになった。このことから、アリエスによる「子ども」の誕生と共に、近代の産物として発展してきた「児童文学」そのものの変容が、「子ども」のいない児童文学を描きだしたハウゲン作品に見ることができる可能性を指摘した。

今後の課題

質疑応答で指摘された原文と翻訳文の相違について、もっと深い洞察ができるのではと考えられる。双方の文は、文法的に何の問題も無いごく自然な文であるとの指摘を受けたが、ごく自然な文であると感じる部分に、双方の文化差異が生じているのではないだろうか。原文には記されていない単語を、翻訳文であえて、原文を補足するために付け加えるという過程には、原文には無い新たな解釈が生じる事になる。そこにグローバル化の今日においてもなお生じる文化差異による「ミスリーディング」が生じている可能性を考えていきたい。このことは、前年のIFセミナーで発表した『若草物語』で、本来白人として想定されてきた登場人物が、日本のアニメーションによって黒人として読み込まれ、ごく自然なものとして受容されていった現象にも通じるものであると思われる。

今回の発表を通じて、児童文学という分野は、研究において多くの可能性があるのではと認識させられた。今後も、ノルウェーを含め、児童文学という分野のなかで研究を続けていきたい。